

研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間： 2007～2009  
 課題番号：19530571  
 研究課題名 (和文) 関係性としての自己：自己概念の対人的・文化的・そして時間的文脈からの総合的検討  
 研究課題名 (英文) Self as Relationship: Comprehensive Studies on the Self-concept from the Interpersonal, Cross-cultural and Longitudinal Perspectives  
 研究代表者  
 金川 智恵 (KANAGAWA CHIE)  
 追手門学院大学・経営学部・教授  
 研究者番号：70194884

研究成果の概要 (和文)：本研究の目的は、自己概念を対人的・文化的・時間的文脈の3点から総合的に検討することであった。study1では「主語」の様態が自己概念の状況即応的組織化に及ぼす影響を検討し、状況即応性の程度は主語の様態によること、study2では自己概念の状況即応的組織化の対人状況における適応的機能を検討し、①肯定的な自己側面へのアクセスが求められる状況と否定的な自己側面へのアクセスが要求される場合では、同じ個人であっても情動反応が異なり、②後者は前者に比べて自己評価が低く、またうつ気分等の否定的情動が支配的になること、しかしこの後肯定的な自己側面へのアクセス強化をすると、自己評価や肯定的情動が再度高まること、study3では、自己概念の組織化における時間経過の影響を検討し、自己概念の組織化は時間経過より状況の影響をより強く受けることを見出した。

以上の結果、特に、Study2とstudy3の結果は、否定的感情が喚起された場合、その制御に自己概念の肯定的側面・要素へのアクセスを強化することが効果的であることを示しており、将来的には企業現場での予防的メンタルヘルスの実現への一助になると考えられる。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of this study is comprehensively investigate the construct and function of the self-concept from the interpersonal, cross-cultural, and longitudinal perspectives. For this purpose three studies were conducted. Study1 aimed at investigating the effect of the usage of “the subject” on the configuration of the working self-concept at a given social context. In the study 2 and 3, the adaptive functions of the working self-concepts.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：自己過程（細目表中）、関係性としての自己、自己概念、他者概念、自己概念の状況即応的組織化、自己概念の機能（以上、細目表以外）

## 1. 研究開始当初の背景

「自己」研究に社会的文脈を導入する傾向は、関係性としての「自己」（self as relation-ship, Gergen, 1987）という視座に代表される、「我と他との関係においてそこに存在する自己」（遠藤、1999）として捉えられる現象である。このような視座は、自己概念の対人行動事態における適応的機能の吟味に、非常に有用である。自己概念の適応的機能として、①行動の認知的準備、②感情制御、③進行中の行動の組織化・方向づけなどが挙げられる。①と③に関連して、自己概念は対人行動事態の環境的要請に即応して組織化されること（working self-concept、Markusら、1987）、即ち、自己概念の総体から、当該の対人状況に最も適応的な自己知識がアクセスされ、当該事態に即応した自己概念のサブセットが組織化されることをわれわれは明らかにした（Kanagawaら、2001）。

一方で自己概念の組織化については文化の影響も検討されている。自己観には、自己を特定の対人状況や他者との関連で捉える傾向が強い相互協調的自己観と、状況に関わりなく、常に一貫した捉え方をする相互独立的自己観があり、前者は東アジア、後者は北米やヨーロッパにおいて顕著である（Markus & Kitayama, 1991）。文化的文脈の影響の観点にたてば、自己概念の状況即応的組織化は、相互独立的自己観が顕著なアメリカなどの文化圏では認められないことになる。しかしながら適応的機能という観点からは自己概念の状況即応性は文化通貫的だと考えられる。この点についてKanagawaら（2001）は、自己概念における文化と対人状況の交互作用的影響を見出した。即ち、日米両サンプルにおいて対人状況の相異に即応した自己概念の組織化が認められ、加えてその傾向は、アメリカより日本において顕著であった。

ところで、自己概念の比較文化的研究には、TST（Twenty Statement Test）のような自由記述による自己概念の測定法が使われてきた（e.g., Cousins, 1989）が、主語への綿密な注意は払われてこなかった。日本語の主語は、「わたし」、「わたくし」、「おれ」、「うち」、「自分」等々、表現形態が多様であるが、その多様性は対人文脈に依存している。これに対し英語の主語「I」は、対人文脈から独立的である。日本人の対人文脈即応的な自己概念記述は、「わたし」という日本語特性

の影響であった可能性がある。

このような関係性からの影響を比較的受けにくい主語の様態として、固有名詞としての名前が考えられる。自分の名前を主語として自分を語る場合には、相手の如何に関わらず、ひとりのまとまりをもつアイデンティティの総体（溝上、2008）としての自己の側面へのアクセスが顕著になると考えられる。つまり、自己概念の状況通貫的安定性が日本人においては、その文化的自己観故に、顕著ではないという指摘は、そのときに主語として何を使うかの関数であると考えることができる。以上のことは、これまで指摘されてきた、文化的特性としての日本人論のよってたつ基盤が何かを明確にすることを可能にする。

第二に、自己概念の状況即応性は、換言すれば、reference pointとなっている、他者概念の問題でもある。日本語の主語の特性は、相手がだれかを意識することによって始めて、文化的文脈における適的な使用が可能となる。このことは、主語使用の際に常に他者意識が存在することを意味している。そうであるなら、状況の相違への敏感さは、翻って他者概念の分化の証左と考えられる。「社会的状況から切り離しえない自己」とは、社会的文脈にあって、その事態において最適な行動の現出を可能にするメカニズムとしての自己でもある。

また、自己概念の社会性を考慮すれば、時間の影響、即ち時代背景の影響からも独立ではありえない。すでに、政治経済体制が大きく変動したポーランドを対象に、体制の変化が自己概念の安定性と変容性にどのような影響を与えたかを検討した。体制変動を何歳で経験したかをクライテリアとした世代間比較の結果、自己概念と現在の社会体制への適応度の関係性構造が世代により異なることが見出されている。しかしこの研究は時間微分的であり、同一人物に対する異なる時代の影響を測定した訳ではない。その意味で時間的文脈の影響の一部しか捉えていないと言わざるを得ない。

以上のような問題意識から、本研究では、自己概念の検討を、対人文脈、文化的文脈、時間的文脈の3点から検討する必要性を痛感した次第である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、自己概念を、対人的、文

化的、時間的文脈の3点から総合的に検討することである。

### (1) 対人的文脈からの検討

ここでは、自己概念の状況即応的組織化について、その様態と適応的機能を詳細に検討することである。前者については1) 状況即応的組織化に及ぼす「主語」の影響を、後者については2) 状況即応的組織化の対人状況における適応的機能について、実証的に検討する。

#### 1) study1: 主語の相異が自己概念の状況即応的組織化に及ぼす影響について

自己概念への対人的文脈の影響を検討すべく、自己記述の際に使用する主語の様態と対人状況の様態の交互作用を検討する。対人状況は、自己記述を、①集団で、②友人とペアで実施する2水準、主語の様態は、回答を、①「わたし」、②各自の名前から始めるの、2水準である。自己記述を「わたし」から始める条件では、Kanagawaら(2001)が見出したように、対人状況の文脈に即応した自己記述が観察されるが、固有名詞で始める条件では、日本人においても状況間変動は少なく、相互独立的自己観において顕著な自己記述と同様の傾向が見出されると考えられる。

#### 2) study2: 自己概念の状況即応的組織化の対人状況における適応的機能について

本研究では自己概念の状況即応的組織化が、対人状況における適応的行動の認知的準備として機能することを実証的に検討する。前述したように、自己とは「我と他との関係においてそこに存在する自己」である。換言すれば、自己であるとは、一方で個としての主体を保ちつつ、他方、環境への変化に柔軟に対応することである。この能力は、対人行動におけるストレス事象や社会変動などの変化にあって、このnegative刺激に対するバッファーとして機能すると考えられる。

本研究では、自己概念の状況即応性という特性から、自己概念の構成をpositive elementsで構成することを試み、そのことがバッファーとなり、negative事象に直面しても、negativeな情動を惹起させないであろうことを検証する。

### (2) 文化的文脈からの検討

#### study1: 固有名詞使用による自己記述様態の普遍性の検討

1) において主語に固有名詞を使用した場合の自己記述の様態は、日本人においても具体的対人文脈や状況からは比較的独立した内容になると想定した。本研究の目的の2番目はこのことを明確にすべく、相互独立的自己観が顕著な文化圏のサンプルと比較することである。固有名詞で始めることを強要する条件では、日本人においても状況の相異に依存

した自己概念へのアクセスが減少し、状況変動を受けない比較的安定した自己の側面、即ち、状況による限定のない自己の特性(例えば性格特性)や、価値、態度、能力などの、自己の内的特性に関する記述が顕著に見出されることが予想される。即ち、アメリカのような、相互独立的自己観において特徴的だと述べられてきた記述傾向と同様の傾向が見出されると考えられる。

### (3) 時間的文脈からの検討

#### Study3: 自己概念の時間軸上の変化の検討

Mead(1934)は、自己は社会的産物、あるいはgeneralized otherを自己内に棲まわせて初めて十全たる自己になると述べている。Generalized otherとは即ち、社会規範である。さすれば時代変化も自己概念の形成に大きな影響を与える。この点を検討すべく、同一被験者のフォローアップスタディを実施し、自己概念の安定性、変容性を規定する要因を検討する。すなわち、自己概念は状況要因が一定であれば時間軸上では安定していること、しかしながら自己概念要素へのアクセスの様態を強化すれば、自己概念の構成内容に変容することを吟味する。この目的のため、自己概念のpositiveな側面へのアクセス強化を実施、具体的には、自己の肯定的要素を3つだけ毎日書きとめることを2カ月継続し、このような強化あり群はなし群に比べて、その後のTSTでpositive記述が増加することを検証する。

### 3. 研究の方法

#### (1) study1: 「主語」の様態が自己概念の状況即応的組織化に及ぼす影響

##### ① 実験対象者

大学生 80名

##### ② 実験計画

主語の様態(自己の名前あり・なし) x 状況要因(集団・友人とのペア)の2 x 2の2要因計画

##### ③ 実験課題: Twenty Statement Test (以下、TST)

##### ④ 独立変数の操作

###### ・主語の様態

自己の名前あり条件: TSTにおいて回答を必ず、自己の名前から始める。

自己の名前なし条件: 自己記述を自由に行う。

###### ・状況要因

集団条件: TSTを教室内で実施、実験者は授業担当教員の筆者。

友人とのペア条件: 学生同士でペアを組み、一方が実験者、他方が実験対象者となる。

##### ⑤ 手続き

4グループの実験対象者にTSTを実施する。「あなたはだれですか」という問いを45秒

間隔で繰り返し提示し、自由記述を求める。その際、前述したように、自己の名前条件では必ず名前から回答を始めるように教示する。また、45秒間隔であること、20回問があることは実験対象者には知らせないでおく。

## (2) study2: 自己概念の状況即応的組織化の対人状況における適応的機能について

### ①実験対象者

大学生 30名  
社会人 30名

### ②実験計画

状況要因 (positive 自己への側面アクセス・negative 自己への側面アクセス) の一要因 within 計画

### ③実験課題: Twenty Statement Test (以下、TST)

### ④独立変数の操作

positive 自己側面へのアクセス条件: TSTにおいて、自己の「得意なところ」、「好きなところ」、「いいところ」についての自己記述を求める。

negative 自己側面へのアクセス条件: TSTにおいて、自己の「不得意なところ」、「嫌いなところ」、「だめなところ」についての自己記述を求める。

### ⑤従属変数

TST における自己側面へのアクセスの様態の影響を検討すべく、以下の3点を測定。

i) 気分調査票 (坂野ら, 1994)

ii) General Health Questionnaire (Goldbergら, 1979)

iii) self-esteem (Rosenberg, 1965)

### ⑥手続き

TSTの実施方法は、study1の集団条件と基本的には同じである。状況要因の操作では、positive 自己側面アクセス条件では、「あなたはだれですか」の教示の代わりに、「あなたの得意なところ、好きなところ、いいところは何ですか」と、negative 自己側面アクセス条件では「あなたの不得意なところ、嫌いなところ、ダメなところはなんですか」と教示した。

TSTの直後にその時の気分、精神的健康、自尊感情を測定した。TSTは、negative TST、positive TSTの順に実施する。その後、認知テストを実施。他者の得点より劣るという偽の結果をフィードバックすることにより、否定的体験を構成、その時の気分を測定する。

## (3) study3: 自己概念の時間軸上の変化について

### ①実験対象者

大学生 30名  
社会人 30名

### ②実験計画

時間要因 (1回目 TST・2回目 TST) x 状況要因 (positive アクセス強化あり・なし) の二要因計画、但し、時間要因については within 計画

### ③実験課題: Twenty Statement Test (以下、TST)

### ④独立変数の操作

・時間要因 同一実験対象者に対し、2ヶ月の間隔をおいて2度 TST を実施。

・状況要因

positive アクセス強化あり条件: 2回の TST の間に、毎日、positive 自己側面へのアクセスを練習する。具体的には、自己の肯定的要素を3つ、毎日書きとめることを2カ月継続する。

positive アクセス強化なし条件: 上記の操作導入なし

### ⑤従属変数

TST の記述数、およびカテゴリー数、

### ⑥手続き

TSTの実施方法は、study2の positive 自己側面へのアクセス条件と同じである。状況要因の、positive アクセス強化あり条件では、1回目の TST 実施後、自分の肯定的要素を毎日3つ書き出し、それを2カ月継続するように教示した。なし条件ではこのような教示はしない。2ヶ月後に再び positive TST を実施する。

## 4. 研究成果

研究成果については紙面の都合上、study2と study3 をまとめてまず記載する。最後に study1 の報告を行う。

### (1) 自己概念の状況即応的組織化の対人状況における適応的機能及び自己概念の時間軸上の変化について

#### ①自己概念へのアクセスの様態と直後の気分との関係について

自己概念へのアクセスが、positive な側面が negative な側面化によってその後の気分が影響を受けるか否かを検討した。その結果、抑うつ、不安などの否定的気分は negative

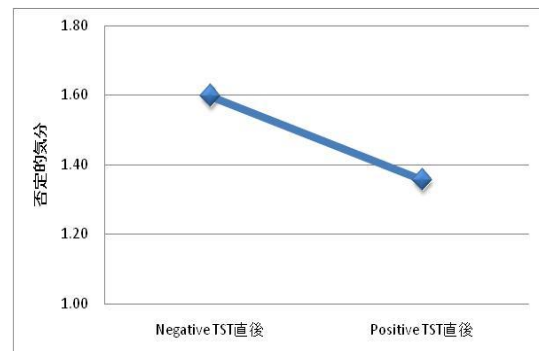


図2 アクセス様態と否定的気分との関係  
アクセス時の方が positive アクセス時より高く、対照的に爽快感などの肯定的気分は前者より後の方が高く、この結果はいずれも有意であった（順に、 $t(26)=2.32, p < .05$ ,  $t(26)=2.76, p < .05$ ）（図1、図2）。

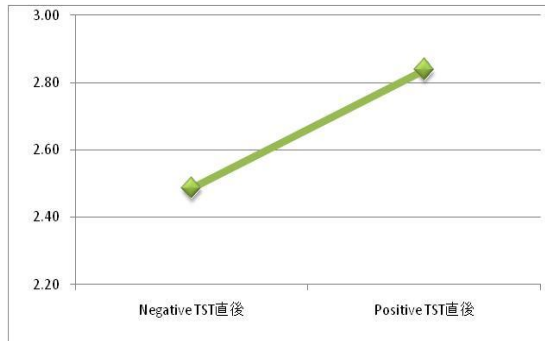


図2 アクセス様態と肯定的気分との関係

以上は社会人の結果であるが、学生も同様の傾向を示していた。

②自己概念の状況即応的組織化の否定的経験のバッファーとしての機能について

上記テーマの検討のため、positive な自己要素の機能に注目した。われわれは、working self-concept の構成が positive な要素で構成されること、すなわち、自己の肯定的要素へのアクセスを強化することにより、否定的事態に遭遇しても否定的感情の惹起が緩和されると考えた。その証左として、study1 の結果が挙げられる。これは working self-concept の構成が positive 要素の場合、その時の肯定的感情状態がバッファーとなり、否定的事態に遭っても、「落ち込み」は少なくなると考えられる。

以上を検証すべく、2 か月にわたる肯定的自己側面アクセス強化後、認知課題において他者より得点が低いという偽のフィードバックにより、否定的経験を構成した。この直後の気分を測定した結果、自己についての不安等の否定的気分の値は、positive 自己側面アクセス直後の値と有意差は認められなかった（図3）。これに対し、positive アクセスの強化なし群では negative 経験直後、再び否定的気分の上昇傾向が観察された（ $t(29)=1.41, p = .15$ ）

以上の結果、特に、Study2とstudy3の結果は、否定的感情が喚起された場合、その制御に自己概念の肯定的側面・要素へのアクセスを強化することが効果的であることを示しており、将来的には企業現場での予防的メンタルヘルスの実現への一助になると考えられる。

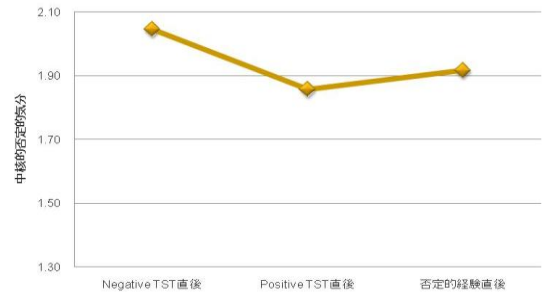


図3 否定的経験後の気分変化

## (2) 主語の様態が自己概念の状況即応的組織化に及ぼす影響について

TST の自由記述をカテゴリー化し、各々のカテゴリーの生起率を算出した。各カテゴリーの生起率を従属変数、主語の様態、状況要因を独立変数として MANOVA を実施した。その結果、カテゴリーの生起率に主語の様態の主効果が認められた（ $F(15,48)=1.97, p < .05$ ）。予想したとおり、自分の名前を TST を行う場合はそうでない場合より、自己の内面に関する比率が多く、アメリカの大学生と類似した結果を示していた。

この結果は、比較文化による、文化的自己観の検討における「主語」という、アイデンティティ喚起の要因の重要性を示唆していると思われる。この結果から、日本人が状況により左右されやすいといういわゆる日本人論の再考の必要性が示唆された。

## 引用文献

Cousins, S.D. (1989) . Culture and Self Perception in Japan and the United States. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 124-131.

遠藤由美 (1999) 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究、**39**、150-167

Gergen, K.J. (1987) . Toward Self as Relationship. In K.Yardley and T.Honess, (Eds.), *Self and Identity: Psychological Perspectives* (pp.53-63) . New York: Wiley.

Goldberg, D.P., & Hillier, V.F. (1979) . A Scaled Version of the General Health Questionnaire. *Psychological Medicine*, **9**, 139-145.

Kanagawa, C., Cross, S.E., & Markus, H.R.(2001). "Who am I?": The Cultural Psychology of the Conceptual Self. *Personality and Social Psychology Bulletin*,**27**,90-103.

Markus, H. (1977) . Self-Schemata and Processing Information About the Self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 63-78.

Markus, H., & Wurf, E. (1987) . THE DYNAMIC SELF-CONCEPT: A Social Psychological Perspective. *Annual Review of Psychology*, **38**, 299-337.

Markus, H. R., and Kitayama, S. (1991). Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.

Mead, G.H. (1934) . *Mind, Self, & Society*. C.W. Morris (Ed.). Chicago, IL: University of Chicago Press. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳 1973 精神・自我・社会 現代社会学大系 10 青木書店)

溝上慎一 (2008) 自己形成の心理学：他者の森をかけ抜けて自己になる 世界思想社 ,2008.10.

中川泰彬・大坊郁夫 (1985) . 「日本版 GHQ 精神健康調査票《手引き》」 日本文化科学社

Rosenberg, M. 1965. Society and the adolescent self-image. NJ: Princeton University Press.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982. 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学 研究、30、64-68.

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

金川智恵・福井誠 (印刷中) 社会心理学の研究成果を応用した集合研修 (感情の自己制御メソッド) による予防的メンタルヘルスの提案 その①  
一病は「気」から、気持は「知」から— (査読なし) 追手門学院大学経営学論集

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

金川智恵 (KANAGAWA CHIE)

追手門学院大学・経営学部・教授

研究者番号：70194884